

【10】

氏 名 (本 籍)	桜 井 茂 男 (長野県)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 329 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 61 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	内 発 的 動 機 づ け に 関 す る 自 己 評 価 的 モ デ ル の 実 証 的 研 究
主 査	筑波大学教授 教育学博士 高 野 清 純
副 査	筑波大学教授 教育学博士 福 沢 周 亮
副 査	筑波大学教授 教育学博士 杉 原 一 昭
副 査	筑波大学助教授 渡 辺 光 雄
副 査	筑波大学助教授 藤 田 和 弘
副 査	筑波大学助教授 教育学博士 市 村 操 一

論 文 の 要 旨

(1) 論文の構成

本文 400 字詰原稿用紙 455 枚，文献 149，付録 3 枚から構成されている。

(2) 論文の概要

第 1 章序論では，本研究の出発点として，内発的動機づけの意義を明確にするために，従来用いられている内発的動機づけの定義に始まり，概念化の歴史，方法論の変遷，内発的動機づけ研究の今日的意義について論じられている。続いて，本研究の出発点となった Deci (1975) の認知的評価理論 (Cognitive evaluation theory) を，多数の研究成果に基づいて詳細に検討し，主要な 2 つの問題点を指摘している。

第 2 章では，従来の研究の検討から見出された本質的な 2 つの問題点を検討するために，2 つの実験が行われ，上述の指摘の妥当なことが明らかにされた。さらに，これらの実験結果と従来の研究に基づいて，内発的動機づけに関する独自のモデルが提唱された。これは自己評価的動機づけ (self evaluative motivation : 略して SEM) モデルと命名された。このモデルを図示すれば，図 1 のとおりである。このモデルによって，学習行動における内発的動機づけの役割，特に，内発的動機づけが外的報酬によって開発される過程を適切に説明することができると考えられた。SEM モデル

を実証的に検討することによって、その妥当性を検証することが、本研究の目的とされた。この実証的検討は、実験室的研究と教室場面における研究とにより、体系的、総合的になされることが決定された。

第三章では、SEMモデルの実験室的研究による検討が試みられた。そのために、9

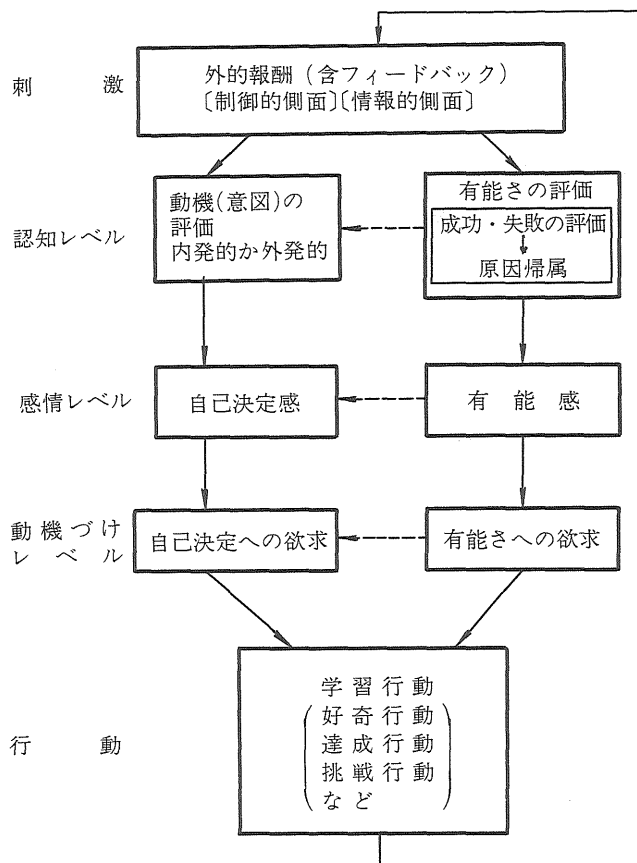


図1 自己評価的動機づけ (SEM) モデル

つの実験が行われた。まずは、最初の3つの実験によって、外的報酬として代表的なもののみなされている言語的報酬（賞賛）と物質的報酬（トークン）を用いて、SEMモデルの検証が実施された。そのために、自由課題選択法が独自に開発された。また、この方法を改良した手続きによって、SEMモデルのそれぞれの過程が検討され、支持する結果が得られている。同時に、外的報酬としての言語的報酬、物質的報酬の外に、フィードバックと言語プラス物質的報酬を用いて、内発的動機づけにおける外的報酬の効果が検討され、この実験的研究によっても、SEMモデルの妥当性が支持された。さらに、外的報酬に類似した外的操作を用いて、SEMモデルの検証が試みられた。外的操作としては、評価の予告、報酬の予告、言語的報酬量、物質的報酬量、原因帰属についての

教示が用いられた。その結果、原因帰属についての教示の役割を除いて、ほぼSEMモデルを支持する結果が得られた。これらの実証的研究の結果について、総合的な考察がなされ、SEMモデルの妥当性が全体として検証され得たことが確認された。

第4章では、第3章で実験的に検証されたSEMモデルを、児童・生徒を対象として、学業達成という現実的な場面で、検討することが試みられた。ここでは、日常の教室場面を用いるということもあって、実験的な手法を用いることが困難であるので、質問紙による検討がなされた。そのために、まず動機づけ測定尺度の開発が行われた。すなわち、Harter (1979, 1980, 1981) の内発的動機づけを測定するために構成された尺度を参考にしながら、SEMモデルの認知、感情、動機づけの各レベルの諸要因を測定することのできる尺度が、あらたに開発された。多数の被検者に実施して得られた資料がテスト理論に基づいて検討され、十分な信頼性と妥当性を有する尺度であることが確認された。こうして開発された動機づけ測定尺度を実施して得られた資料や学業成績などを用いて、重回帰分析（パス解析）による因果関係が分析された。その結果、SEMモデルの各過程間に因果関係の存在することが、ほぼ確かめられた。同時に、実験室の研究で用いられた外的報酬に相当するいくつかの外的変数を用いて、SEMモデルが相関分析によって検討された。外的変数としては、賞賛と叱責、養育態度、教師の性格特性並びにリーダーシップ、学習法が取り上げられた。いずれの場合にも、SEMモデルを支持する結果が示され、付加的な知見も得られた。このような教室や日常的状況における一連の研究によって、SEMモデルが児童・生徒の日常の学業達成場面でも、ほぼ検証され得たということができるであろう。

第5章では、本研究で見出された研究成果が実際に教育現場にも適用できるかどうかを明らかにするための一つの試みとして行われた事例研究が報告されている。つまり、学習意欲の低い生徒の改善のために、本研究における実証的研究によって示唆された方法が実行され、その有効性が確認されたのである。このことによって、SEMモデルに基づく教育的、臨床的指導が児童・生徒の意欲の強化のために効力をもっている可能性が示唆されたといえよう。最後に、今後の研究の発展のために重要な5つの課題が指摘され、考察された。

## 審 査 の 要 旨

内発的動機づけが授業において重要な役割を演じる可能性については、かなり以前から指摘されている。しかし、内発的動機づけの効果的な方法についての研究は多数試みられているが、内発的動機づけそのものの本質についての検討は、まだ十分になされているとはいえない。つまり、何故内発的動機づけが、児童・生徒の意欲の向上にとって効果的であるのかという問題は、ほとんど未解決のままに残されているといっても過言ではなからう。

本論文は、この困難な問題に取り組み、ユニークな仮説を提唱し、その検証に成功した。この仮説をその検証のための研究の一部は、教育心理学研究誌に掲載され、高く評価され、城戸奨励賞を

受けている。本論文では、この基本的な研究をさらに発展させて、日常の授業にまで適用できるモデルと、児童・生徒の意欲を強化するための具体的な方法を提案することを試み、その点でも、ある程度成功したということができよう。

さらに、結果的には、これまで別個のものとして考えられてきた内発的動機づけと外的動機づけとの関連を明らかにした、というより、内発的動機づけ概念を改訂することになったということは、重要な発見であるといえることができる。その一方で、統計的分析結果の解釈に必ずしも適切でないところがあるとか、実際の教室場面での検討が十分とはいえず、その具体的な研究法にも工夫を加える余地が少なくないという欠点が指摘され得る。しかし、それらは本研究にのみあてはまる問題点ではなく、多かれ少なかれ、教育心理学的研究に対してなされる批判であり、それをもって本研究の価値を低下させるものとは考えられない。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。